

「平治物語」の達成・その一

—「保元物語」の展開と「平治物語」

日 下 力

The Achievement of Heiji-Monogatari (1)

—The Development of Hogen-Monogatari and its Relation to Heiji-Monogatari

Tsumomu Kusaka

はじめに

「平治物語」は、「保元物語」や「平家物語」と同じく、琵琶語りにも供されて流動と変遷を遂げた作品であるが、この作品が最も充実した密度の濃い文学的世界を達成したのは、金刀比羅本に代表される諸本群の段階であったと考えられる。大きく、陽明・学習院本段階、金刀比羅本段階、流布本段階と三段階にわたる「平治物語」の展開において、金刀比羅本は陽明・学習院本段階における志向の分裂（別稿で詳論）を克服し、源氏一族の悲劇と再興への伏線語る文学として自らの主題を確立している。それが、流布本段階に至ると夾雑物が入り込み、作者の意識は拡散している感がある。本稿の目的は、金刀比羅本に焦点を絞ることにより、「平治物語」がいかなる文学的内質をもつて達成され、いかなる独自性をかちえているかの一端を探ることにある。が、まず、先だつて「平治物語」の達成が「保元物語」や「平家物語」との緊密な関係のもとになされた事実を確認しておくことが必要と思われる。

私はかつて、「平治物語の古態本について——高阪説・笠説をめぐる疑問」（『古典遺産』昭和45年12月）と題する別稿で、「平家物語」の影響が「平治物語」の流動展開に深く作用したことを、重盛

像や清盛像の変質等に基づいて指摘し、且つ、その影響が陽明・学習院・松平本は極微で物語の本質的なところまで及んでいない点をもって、古態本認定の一規準とした。その後、田中宣一氏も金刀比羅本に「平家物語」の影響を認められ、北川忠彦氏は「保元物語」の金刀比羅本をも視野におさめて同様の見解をとられている。⁽⁴⁾「平治物語」が「平家物語」の影響を受けて展開していったことは、否みがたいところであろう。

「保元物語」との緊密な関係は、古来、同一作者説が優勢であったことでも知られる。しかし、永積安明氏が「日本古典文学大系 保元物語・平治物語」（昭和36年岩波書店刊）の解説において、両物語に関する新たな諸本体系説を提唱し、「保元物語」では文保・半井本を、「平治物語」では陽明・学習院本を現存最古態本と認定されて以来、両物語の関係も再考を促されるに至った。この二つの作品の古態本について比較するならば、両者の関係はむしろ疎遠で、作品の性格も異なり、異作者説の方が極めて濃厚と思われる。が、金刀比羅本どうしになると、永積氏が同解説で、「二つの物語を、できるだけ同じ構造に仮構しようとしたもの」と言われることが首肯されてくることとなる。氏は、その例証として、「平治物語」の悪源太義平が「保元物語」の為朝と相似形の人物に造形されるの

が、金刀比羅本の段階になってからであることをあげておられる。金刀比羅本「平治物語」は、「平家物語」や「保元物語」を知ることなしには語れない世界を構築しているのである。この三物語の交渉の背景には、琵琶語りの場が容易に想像されもするだろう。⁽⁶⁾

ところで、「保元物語」と「平治物語」との関係で常にくり返し指摘されてきたことは、後者中の義平像が前者中の為朝像を模して形象されているという点であった。このくり返しは、「平治物語」が「保元物語」を範として造形されているという漠とした通念を、人々の脳裏に刻んできたのではあるまいか、という疑念がある。永積氏の提言は、古態本の段階では二人物の相似形ができあがっていなかったことを判明させ、そうした考えに警告を与えたものの、金刀比羅本の段階に関してはなお、「平治物語」の側が「保元物語」の影響を一方的に受けているという印象を与える表現からまぬかれていないように思われる。当然、両物語の展開は、相即的な関係でなされたであろう。⁽⁷⁾ 本稿の「その一」では、この関係を鮮明にし、また、「保元物語」と「平治物語」との文学的脈絡形成の具体相を明らかにする為に、「保元物語」が「平治物語」の存在にかかわって変貌した一面について論ずることにしたい。

ここに述べたところで推測がつくように、「保元」「平治」「平家」の三つの物語は、少なくともその流動展開のある段階では、完全にパラレルな位置に立つことがあったものと考えなければならぬ。言うまでもなく、金刀比羅本「平治物語」は、他の二作品とパラレルな立場に立った後の創造になる。従来の文学史の記述は、一般的に、「平治物語」を「保元物語」から「平家物語」へ至る一階梯とするか、「保元物語」の姉妹編として一括し、「平家物語」の前段階的作品と位置づけるか⁽⁸⁾しつつ、それを説くのに金刀比羅本や流布本の分析をもってしてきたが、今後、敵に慎しまなければならぬだろう。金刀比羅本「平治物語」の文学性を「平家物語」の前段階的なものとして措定することは差し控えなければならぬし、「保元

物語」の金刀比羅本と「平治物語」や「平家物語」との関係でも同様のことが言えるであろう。この点も踏まえて、以下、具体的な論述に移らうと思う。

「保元物語」の展開と「平治物語」

まず、「保元物語」が「平治物語」と相即的な関係の下に展開したことを示す事例のいくつかをあげ、次いで、「平治物語」に関連ある「保元物語」中の人物像の変質を通して、「平治物語」への流れが形成されている実体を判然とさせたい。当面、粗上に載せるのは、古態本と金刀比羅本の「保元物語」になるが、他の諸本にも検討の筆を費すこととする。

「保元物語」の古態本は半井本を使用、未刊国文資料刊行会刊「保元物語（半井本）」と研究⁽⁹⁾の翻刻本文に従った。「平治物語」の古態本については完本が現存しない為、上巻は陽明本、中・下巻は学習院本であるが、これも未刊国文資料刊行会刊「平治物語（九条家本）」と研究⁽⁹⁾の翻刻本文により、両物語の金刀比羅本は岩波書店刊「日本古典文学大系」所収の本文を用いた。

「保元物語」金刀比羅本は、乱がはてて後の謀叛人処刑に関する一条を次のように記している。傍点は、注意を喚起する為に私に付したものである。

……同十七日夜、悉誅せられけり。左衛門大夫家弘（以下三人略）をば、藏人新判官義康是を承て、大江山にて切てンげり。大次助度弘を、伊豆左衛門尉信兼、六條河原にて是を切る。中宮の侍の長廣をば、平判官実俊船岡山にて切てンげり。（中略）平右馬助入道忠正（以下四人略）をば、播磨守清盛是を承て、六條河原にて切てンげり。（大系一四二頁）

文中に傍点を付したのは、「夜」「山中」で刑を執行するという不自然さを指摘したい為である。夜の山中では、囚人を奪還される恐れがあり、大江山や船岡山に着くまでの道中も危険であろう。一方では、賀茂の六条河原でやすく「と死刑執行の任を果している人々もいるのである。右の部分、古態の半井本は、「夜」という設定にはしていない。「夜」でないのであれば、山中での斬首は、むしろ、人目を避ける為のはからいとして、また、遺体を簡単に処置できる便利さの点において、逆に納得のいく方法ということになる。金刀比羅本は、半井本の自然な叙述を、あえて不自然な叙述に変えているのである。更に後の記述でも、「此光弘法師と申は、去十七日の夜切られたりける……」（大系一六三頁）と、「夜」であったことを再確認している。

他の諸本では、永積氏が前記解説で九類に分類されたうち、金刀比羅本（第四類）と同じ記述内容のものは、京師本（第五類）、正木本（第六類）、杉原本（第七類）、保元記（第九類）の四種、半井本（第一類）と同じく「夜」となっていないものは、鎌倉本（第二類）京図本（第三類）、流布本（第八類）の三種である（以下、第何類の記述は省略）。ここでは永積氏が金刀比羅本以前の姿を有するとされる鎌倉本・京図本の記述に注意を促しておこう。流布本は金刀比羅本より後出と考えられるが、古態本に基づいて再構成した為か、以下の例証でも半井本と一致する場が多い。

金刀比羅本等の作者は、なぜ、死刑執行を「夜」のことに改変したのであろうか。事実を当時の日記「兵範記」⁽¹¹⁾に求めれば、保元元年七月のこの時の処刑は、二十八日と三十日の両日にわたったもので、前者の場合は夕方の刑執行であったことが知られる。刑場は、物語の記述と等しく、河原近く（「六波羅辺」）と山中とに分かれていた。

廿八日丁卯 今夕、被_レ行_二斬罪_一云々。忠貞（以下四人略）己上、播磨守清盛朝臣、於_二六波羅辺_一斬云々。

卅日己巳 又、被_レ行_二斬罪_一、家弘（以下六人略）己上、藏人判官義康、於_二大江山辺_一斬云々。為義（以下五人略）己上、左馬頭義朝、於_二船岡辺_一斬之。
（返り点筆者）

「兵範記」の作者は、二十八日については夕方であった由を明記しているにもかかわらず、山中の処刑であった三十日については何も特別に記してはいない。日中のことと推量するのが妥当であろう。もし、金刀比羅本等の作者が右の如き事実に基づく改変を試みたのであるならば、すべての刑執行を「夜」に設定するのではなく、「夜」または「夕方」と「日中」とに分けた設定を考えなくてはならない。

そこで、「平治物語」諸本にある、斬首に処せられた悪源太義平の最後の言葉が、重要な意味をもってくる。古態本（学習院本）の本文を引用すれば、

清盛をはじめ伊勢平氏程の、ものにも覚えぬ双原こそなけれ。保元の合戦の時、源平両家の者共あまた誅せられしに、夜陰にこそきられしか。（中略）さすが義平ほどの者を白昼にきる不当人やある。
（未国六五頁）

「保元物語」金刀比羅本等の作者は、この言葉との呼応を目的したのに相違ない。もともと、古態本を除く「平治物語」諸本では、処刑を夜とのみに限らず、「日中」「山」「夜」「河原」という二通りがあった由の、事実に近い内容となっており、「保元物語」金刀比羅本等が「山」「河原」ともに「夜」の処刑とするのと微妙な差異を見せている。しかし、「保元物語」中で、「平治物語」にいう「日中」「山」に対応する記事は、船岡山で切られた頼仲ら五人と乙若ら四人のことも解されうるのであり、両者間の差異は決定的なものではないだろう。やはり、「保元物語」金刀比羅本等の不自然な改変は、「平治物語」中の義平の言動が一般に著名となった為に、それとの呼応を目ざした故であったと考えるのが、最も蓋然性が高いものと思われるのである。

また、半井本に金刀比羅本には加わっている為朝の言、「やうれ、をのれらもきけ、人の流さるゝ事は皆歎きにてあれ共、為朝は悦ぞ。」(大系一七五頁)が、「平治物語」の古態本段階から存在する頼朝に関する叙述、「皆人はながさるゝをなげゝども、兵衛佐は悦けり。」(未国九一頁、諸本ほぼ同文)からきていることも間違いないであろう。他諸本では、京図本と流布本にこの為朝の言葉がないが、あとは存する。

更に、治政に対する作者の主張を記した「平治物語」冒頭部の影響が、金刀比羅本「保元物語」の近接した部分に散見されることも重要である。それは、出陣を前に義朝が主上に召され、信西と応対する一連の場面においてであるが、第一に、義朝の昇殿勅許申請に対する回答の宣旨、

「乱世には武を以てしづむべしと云本文あり。世既みだれぬ。義朝を忠賞せずはあるべからず。」(大系九一頁)

が、あげられる。「平治物語」冒頭では、王者が人臣を賞するには文武二道を優先すべきであると説いた後、「なかんづく、まつだいのながれにおよびて」は、朝威を蔑如し野心を抱く者も出るから、「ちうしやうせらるべき」者は「勇悍のともがら」であると説いている(未国一三二頁、傍点筆者。杉原本・流布本は、前部に長文を増補)。「乱世」と「末代」は相通する時代認識のあり方であろうし、「忠賞」の語句の一致は、発想の共通性と相俟って、両者間の影響関係をほのめかしている。

第二に、信西が、義朝の夜討献策を入れ、鼓舞の弁舌をふるう一節。

其君の功をたてんとする時は、必志を將に押。勝事を求時は、愛を兵にいたす。將は君の頼處、兵は將の頼所、縦は臂をつかひ、臂指をつかふが如し、(大系九二頁)

この一節は、同じく「平治物語」冒頭部の最後に記されている、唐の太宗皇帝が兵に与えた厚情の逸話と合致する。その中には、「み

づからてをくださね共、こゝろざしをあたふれば」(同前)という一句も見え、右文の「志を將に押」と類似の表現と思われるが、なお、右の一節に関しては、他の典拠によった可能性が存することも否定できない。

第三に、些細な箇所ではあるが、この際、最も示唆に富むのは、信西紹介の短文、

此禪門、諸道をけんらんして、才文武をかねたり。(大系九〇頁)

である。儒家の出である信西が、「武」の才にもたけていたというのはおかしい。金刀比羅本作者が、この一連の場面を構成してゆく中で、「文武」を説く「平治物語」冒頭が念頭にあった為に、こうした記述になったものと推察されよう。「平治物語」では、続いた記述される信頼の紹介でも、「文にもあらず、武にもあらず」(未国一三三頁)と「文武」がくり返される。また、これは信西像の形象にも関連するが、「諸道をけんらんして」とある部分は、京図本には「諸道を兼学し、諸事にくらからず」とあり、明らかに「平治物語」の信頼紹介に続く信西紹介で、「しよだうをかねがく」(金刀比羅本等では「兼学」)として、しよじにくらからず」(未国一三三頁)とあるところからの影響である。

無論、上に引用した三箇所は、いずれも古態の半井本には見られないものである。他諸本では、流布本になく、京図本が第一点を欠くのみで、そのほかは金刀比羅本同様の記述となっている。金刀比羅本等は、「平治物語」冒頭の思想に何らかの共鳴を覚え、自らの内部に取り込んでいったものと考えられるのである。

如上の諸点によって、「平治物語」が一方的に「保元物語」からの影響を受けたのではなく、逆に与えてもいたことを確認できよう。そして、次に述べるような「保元物語」の展開に伴う人物像の変質も、このような基盤の上になしとげられたものなのである。

二

私は、「平治物語」の展開過程において、義朝像が朝敵としての白眼視の対象から、悲劇の人としてこの物語の主役的人物へ変貌していった事実を別稿で指摘した。それと歩調を合わせるように、「保元物語」中の義朝像にも、古態の半井本から金刀比羅本への過程で、大きな変化が起きている。

義朝が初めて具体的な姿をもって描かれるのは、合戦を直前にひかえた、「主上三条殿行幸、宮軍勢次へノ事」の章段からである。金刀比羅本では、「平治物語」冒頭の影響が認められたところでもある。半井本の作者は、次の如き言動と共に、彼を舞台上に登場させてくる。

内裏ニテ義朝兵共ノ中ニ打立テ、紅ノ扇ノ日出シタルヲ開キツカウテ申ケルハ、我生テ此支ニ合、身ノ幸也。私ノ合戦ニハ朝威ニ恐テ、思様ニモ振舞ハズ。今、宣旨ヲ蒙テ、朝敵ヲ平ゲ、賞ニ預ラン事、是家ノ面目也。芸ヲ此時ニホドコシ、命只今捨テ、名ヲ後代ニ上、賞ヲ子孫ニ施スベシ、トゾ悦ケル。

(未国三〇頁)

「紅ノ扇ノ日出シタル」がすべてを象徴しているような、いかにも晴れやかで意気軒昂とした姿と言うべきであろう。この気分は、続いて記される夜討献策の義朝の言辞や、人にはばかることもなく、勅許のいまだ下りない昇殿をその場で果たしてしまう果敢な行動にも脈うっている。夜討を献策した義朝は、「此内裏ヲバ清盛ナンドニ守護セサセテ、義朝ハ打手ヲ給リテ、時ヲ移サズ罷向テ、カレ等ヲ先立テ勝負ヲ決セン。」(未国三一頁)と広言し、また、殊なる忠功をあげれば昇殿を許すという約束に対しては、

義朝申ケルハ、義朝合戦ノ庭ニ罷向テ命ヲ全セン夏ヲ不存レバ、死シテ後ハ何カセン。只今ユルサレザラン昇殿ハ、キツヲ可期ゾトテ、押テ階ヲノボリタリケレバ、少納言入道、コハイカニ狼籍也ト申ケレバ、主上アザワラワセ給ケリ。御興ニ入セ

給ケリ。大方ユム敷ゾ見ヘケル。

(未国三一頁)

という振舞いに出るのである。ここには、作法を無視した、新興武士らしい野人の一面が浮き彫りにされている。「死シテ後ハ何カセン」という現実主義的精神、衆目の見る中を「押テ」階を昇った大胆さ。そして、それに対する信西の「コハイカニ狼籍也」という狼狽ぶり、「アザハラハセ給」つつも「御興」に入ったらしい後白河天皇、義朝の行動が引き起したであろう人々の驚きのさわめきが想像される。もっとも、義朝の昇殿は、正しくは乱後のことであった(「兵範記」保元元年七月十一日条記載)。作者は虚構をかまえて、臆することを知らぬ力強い義朝像の形象を手がけたのである。一方、金刀比羅本は、叙述の順序からして大幅に異っている。左に対照表を示そう。

<p>半井本</p> <p>④ 紅の扇を開き、晴れの合戦に臨む喜びを語る。</p> <p>⑤ 主上に召される。</p>	<p>金刀羅本</p> <p>⑥ 主上に召され、庭上に伺候。</p> <p>⑤₁ 主上、合戦の大將を義朝に下命し、忠功とひきかえに昇殿勅許の由、信西を介して伝達。</p> <p>⑥ その場での昇殿勅許を申請。信西、異議をとなくなるが、勅許下り、昇殿を果たす。</p> <p>④ 合戦の次第を問われ、夜討を献策。</p> <p>⑤₂ 信西、夜討の儀に賛同し、義朝を鼓舞。</p> <p>☆ 本陣に帰り、先祖伝来の八龍の鎧を着す。</p>
<p>③ 合戦の次第を問われ、夜討を献策。</p> <p>① 主上、夜討の儀に賛同し、忠功とひきかえに昇殿勅許の由、信西を介して伝達。</p> <p>② その場で、勅許のない昇殿をえて果たす。</p>	

☆ 出陣を前に、昇殿のあかしにと車の堅鞭に鞭を結びつける。
(部下、落涙す)
④ 紅の扉を開き、晴れの合戦に臨む喜びを語る。

この表から、金刀比羅本が半井本と際立って異っている点が、三点指摘できる。第一は紅の扇の条が最後に置かれていること、第二は義朝の昇殿が逆に前へ移されていること(それに伴い、半井本の①の部分二分される結果となっている)、第三は八龍の鎧と堅鞭の挿話(☆印)が新たに増補されていること、である。これら三点は、金刀比羅本作者が義朝の昇殿を中心にした構成を考えた結果と見られる。すなわち、一連の場面の核とすべく義朝昇殿をはじめに語り(第二点)、義朝がいかに昇殿に望みをかけ、それを果たすこととどれほど気分を高揚させたかを伝える為に、昇殿のあかしとなる忘れ形見として車の堅鞭に鞭を結びつける挿話を導入し(第三点)、宿願の昇殿を遂げたことよって、思い残すことなく戦場に臨もうとする晴れやかな姿を、紅の扇の一件に象徴させて最後に置く(第一点)⁽¹³⁾。金刀比羅本作者は、半井本作者が試みた虚構を更に拡大し、大きくクローズアップして見せるのである。

では、この構成の再編と表裏の関係にある義朝の変質は、どのようなものであつたらうか。金刀比羅本が読者に最初に印象づけてくる彼の映像は、赤地の錦の直垂を着し、脇楯、小具足姿に太力を帯び、「鳥帽子引立、庭上にひさまづき、畏てぞ候ける。」(大系九〇頁、傍点筆者。半井本なし)という殊勝な姿である。そこに推量されるのは、半井本における如き勅許以前に昇殿をしてしまうような向う見ずなたくまじさではなく、礼義骨法を正しくわきまえた凛々しさであろう。昇殿に際しても勅許の下のを待ち、勅許を得て御所の階段をのぼる時は、「なから計」(大系九一頁)で歩をとめ、それ以上の行動に出ようとはしない。彼は自ら律することを充分に心得

ているのであり、「コハイカニ狼籍也」(半井本、前掲)という非難を受けそうな人物とは、とうてい思われぬ存在となっているのである。

昇殿勅許を申請する彼の言葉も、周到な論理を伴って柔軟・冷静であり、半井本における「……死シテ後ハ何カセン。只今ユルサレザラン昇殿ハ、キツヲ可期ゾ」(前掲)という直情性は、はるかに後退している。

「家に傳る事候。合戦の庭に出て、死は案の内事、生は存の外のこと也。然に懸命けんめいにおいては、故院の御遺命ごいじめい并に宣旨の趣にかはり候。又、骸を戦場にさらさん事只今也。生て再び帰参かへりまゐべき事こそ後栄をも期候はめ、天運に任せんずるより外は頼たのすくなき命也。後日に勅許有べくは、只今宣旨を下さるべしと覚候。其故は、年来の所望すゝめ達ぬと存るならば、少いさむ心も候べし。所望達せずして二となき命をすてん事、且は妄念ともなり、且は無念にも候べし。」(大系九一頁)

彼の言葉の中で強調されているのは、①②③で示したところの、死に対する自覚である。前引した半井本の場合と比較するならば、この点がいかに増幅されているかは明らかと思われる。確かに半井本の場合も、戦場における死を覚悟した上での言動が描かれてはいるが、金刀比羅本に比べ、死の覚悟と昇殿を奪いとする行動とは余りにも単純である。かげりのない力強さがあるかわりに、内面における沈潜は見られない。金刀比羅本の場合には、「家に傳る事候」という、内に一念を秘めた重々しい言葉が始まり、三度にわたって死の覚悟が強調され、更に半井本にない「其故は」以下の言葉(☆印)を加えて、昇殿勅許の効用を説き、且つ、昇殿を許されぬまま死んだ時には「妄念」ともなりかねないであろう執心のほどを披瀝して見せる。そして、彼は「階下近く」進みよりながらも自らを抑制し、勅許の下のを待つのである。「後日に勅許有べくは、只今宣旨を下

さるべしと覚候。」という慎重なもの言ひ方の裏には、死を覚悟している人間の、後には引きそうもない重さが感じられる。半井本に比し、義朝像は明らかに深い内面性を獲得しているのである。

ところで、金刀比羅本作者は、この義朝の言葉を創出するにあたり、半井本で他の人物に言わせている言葉を転用したようである。というのは、①の部分「合戦の庭に出て、死は案の内事、生は存の外のことも也。」が、為朝に勝負を挑んだ山田小三郎是行（金刀比羅本「維行」）の言葉、「弓矢取者ノ合戦ノ庭ニ出テ死ハ勿論也、生テ帰コソ不思議ナレ。」（未国四一頁）の、形をやや変えた転用と思われるからである。ちなみに、金刀比羅本の山田小三郎はこの言葉を口にしなない。金刀比羅本作者が義朝像の内面化に意を用いた一端が、このような転用の中にもうかがえるであろう。

夜討献策の後に増補された挿話では、戦いに臨む義朝の心中とそれを聞いた人々の落涙とが描かれる。車の堅鞭に鞭を結びつける義朝の行為に不審を抱いた部下に対して、彼はこう語るのである。

「下野守義朝は日來の昇殿ゆるされたるぞ。陣頭にかばねをさらさむこと只今也。されば誰かはかゝることあるとも披露すべき。若、子共の中にいきのこる者あらば、『我父は、早昇殿許されける。是みよかし』と思、わすれがたみにこそ。」と語りれば、兵共、各鎧の袖をぞぬらしける。（大系九三頁）

傍線⑤で示したように、彼はまたしても死を口にする。死は死でも、前引の④同様、「只今」の死である。猶予の許されない「只今」という時間の中に自らの死を見ている義朝の張りつめた心から、昇殿勅許の執拗な要請も、忘れ形見を残すことへの心配りも生まれきてている。「子共の中にいきのこる者」があることすら、「若」という、まずありえない仮定としてしか彼は考えていない。一族死滅することも覚悟した上で、我が子へ忘れ形見を残すのである。それ故に人々は落涙する。作者は、数刻後には無に帰しているかも知れない自己の存在を先取りしつつ、今の時点を生きる人間として、義

朝像を強くうちだしているのである。

いわば、凝縮された、密度の濃い内面を付与された義朝像には、新たな造作や粉飾が外面的にも施される。例えば、作者は兵具姿のままの昇殿を「昇殿の儀式、弥らかにぞみえし」と評し、「昇殿は、是、象外の撰也。俗骨もて蓬萊の雲をふむべからず。（中略）今日、初めて殿上の御冊に名を残しけるは、六孫王より傳はれる弓矢の面目とぞ覚し。」（大系九一頁）と讃辭をつらねる。また、本陣に帰った義朝が先祖伝来の八龍の鎧を着る場面も新たに取り込んでいる。しかし、最も深い意味をもつと考えられるのは、堅鞭の挿話の後に移行させられた紅の扇を使う場面である。作者はその時の義朝の英姿を描写して、

白旄の旗をなびかし、黄鉞の鉞をかゝりやかし、魚鱗・鶴翼の陣を全し、星旄電戰の威をふるっていざみ進てうち出し、刑勢ことがら、あッばれ大將軍也とぞみえし。（大系九四頁）

と記している。兵どもに涙を催させるほどの内心を自ら語り聞かせた後にあつて、義朝のこの雄々しい姿は、一層、鮮やかである。死地に越く者の悲しみから、それを超克してゆく崇高な雄々しさへと、情緒の流れは一つの高まりを形成している。悲しみと雄々しさの同居——いわゆる悲壮美の世界に彼は立っているのである。おそらくは平治の乱における義朝の哀れな死故に誇りかな昇殿を中心にする構成をとった作者は、昇殿に対する義朝の執心も、それを得たことによるはなやかさも、すべて悲壮な情趣の中に統括しようとする。その根元にあるものは、義朝の「只今」の死に対する自覚である。早くもここには、「平治物語」にもがたられる悲劇への予兆が漂わされている。

他諸本の該当箇所は、流布本を除き、すべて金刀比羅本と同構成である。京図本は、最後の「白旄の旗をなびかし……」が簡略で、「あはれ大將軍やとぞ見えし」とあるのみであるが、基調は金刀比羅本と相違ないものと考えられる。「保元物語」金刀比羅本等の作

者は、半井本の義朝登場の場に大胆に手を加え、義朝像そのものを拡大し、変質させているのである。

☆

義朝像の新しいイメージをつくり出す意図をもって改変されている例は、他にも見出せる。例えば、金刀比羅本等の諸本では、義朝が為朝の陣に寄せようとして、その方角が方塞りにあたることや、朝日に向って弓を引くことになることをはばかって迂廻する条(大系一〇八頁)が加わっている(但し、流布本なし、鎌倉本欠巻)が、これは半井本には清盛が出陣に際してとった行動として記されている(未国三三頁。流布本も同然)ものである。山田小三郎の言葉を義朝の場合に転用した前述の例と同然であろう。作者は義朝の行為として転用することにより、彼の倫理性を高めようとしたものと考えられる。

義朝の倫理性が問われるのは、実父為義処刑という一点においてであることは言うまでもないが、今まで述べてきたところからも予測されるように、古態本段階から金刀比羅本等の段階への過程で、為義に対する時の義朝の描き方にも変化がもたらされている。為義斬首の勅命を受けた義朝は、半井本では、父を切ることを勧める乳母子・鎌田兵衛正清に、「更バ正清、何ニモ計テ切奉。」(未国七六頁)と命じてあと姿を消してしまふ。金刀比羅本では、「ともかくも物もいはず、涙をはらくと流」す義朝や、「御対面候て、すかしまいらせ給ひ候へ。」という鎌田の言葉に、「流るゝ涙を押拭、さらぬ跡にもてなし、入道殿の御前に参」る義朝を描く(大系一四三頁)。また、助命がなくなったという自分の虚言を素直に喜ぶ父の言葉に接しては、心中に「むぎさんの御事かな。只今切られ給はんずる事をもしり給はず、かうの給ふぞよ。」と思いつつ、再び「涙のすゝむをさらぬ跡にもてなし」て、ついに処刑の為に父を自邸から送り出す有様を描き込む(大系一四四頁)。金刀比羅本作者は、この場面を義朝の涙で一貫させ、彼の悲嘆とその超克、自己の倫理性

との葛藤を如実に語ろうとするのである。半井本の義朝に涙が描かれることなく終るのと対照的である。

金刀比羅本では、義朝が一度ならず勅命を拒否するという、半井本にはない一条も存在する。彼は、為義処刑の勅命を「再三」にわたって辞退、合戦の恩賞にかえて父の助命を願ひ出たにもかかわらず、「さらば余人に仰下さるべき由、宣旨、頻になりしかば」(大系一四三頁)という窮地に陥り、やむなく受諾せざるをえなくなるのである。作者は、彼の行為が、自己の意志に反したやむをえざるものであったことを伝えたかったのに相違ない。作者の脳裏にあった義朝像の核は、内面的葛藤の苦悶に耐えた行為者の姿であったろう。それは、金刀比羅本「平治物語」で、自分の娘を鎌田に命じて殺害し、次子・朝長を自らの手にかける義朝に通うものである。

この部分に関する他諸本は、鎌倉本が半井本と同構成、流布本が半井本的要素と金刀比羅本的要素を共有するが、他はすべてほぼ金刀比羅本と同じ構成をとる(但し、京図本には義朝の涙がない)。半井本的なあり方は、鎌倉本にその類型を残すものの、しよせん金刀比羅本的なあり方に圧倒されていく定めにあったのだろう。最後出と考えられる流布本は、半井本と金刀比羅本を勘案したものと類推される。

「保元物語」中の義朝像は、上述のように、古態本の段階から飛躍的な成長を遂げ、精神性の深まりと相俟った悲劇的性格を強めることとなる。改めて述べるまでもなく、金刀比羅本「平治物語」中の義朝像と一体化した様相を、そこに認めることができるのである。

三

「保元物語」「平治物語」の古態本どうしが、後出の諸本に比して疎遠な関係にあることは、義朝の幼弟・乙若の言い残した「保元物語」中の不吉な予言と照応する記事が、古態の「平治物語」にだ

けは見出せないことに最も端的に現われている。金刀比羅本段階に至ると、右の事項についても緊密な対応関係ができあがってくる。このことは、義朝像とも関連があると思われるので、ここで触れておこう。

金刀比羅本「保元物語」では、乙若ら幼い四人の兄弟を処刑すべく義朝から差し向けられた波多野次郎義通に対して、乙若が最後に言い残した言葉を次のように記している。

「扱も義通よ、下野殿に申さんずる様はよな、此事共は清盛が讒言に依てたばかられさせ給にこそ。昔も今も例なき現在の父の頸を切、兄弟を失ひ終て、身一つに成て只今平氏にすべられ、終には我身も亡び失て、源氏の種の絶ん事こそ口惜けれ。其時、乙若は少けれ共、能云けりと思合せ給はんずるぞ。遠は七年、近は三年の中をば過し給はじと慥申すべし。今は思ふ事をもいいをきぬ。(以下略)」

一方、金刀比羅本「平治物語」は、逃避行の途次、次子、朝長の首を自ら打たざるを得なくなった義朝に、この乙若の遺言を涙ながらに想起させている。

「保元の合戦に弟共うしなひしとき、乙若が、「平家は終に敵なるべし、我らをたすけをき給はじ、一ぱうの固めにはならんずるものを、今に思ひしり給ふべし」といひをきけること、今こそおもひしられたれ。」

両者間には、乙若の言葉に差異はあるものの、確かな対応関係が認められるであろう(両物語の現存諸本間で、乙若の言葉が完全に一致するものはない)。ところが、古態の「平治物語」では、右に引用した部分は無論、他にも乙若の遺言と呼応する文辭は見当らないのである。

また、「保元物語」も古態本たる半井本では、乙若の遺言が金刀比羅本ほど明確な形をとってはいない。半井本は、泣きやまぬ弟達をさとす乙若の言葉の中に、なかば一人言的に、

哀、下野守ハ悪クスル物哉。是ハ清盛ガ讒奏ニテコソ有ラメ。親ヲ失ヒ弟ヲ失ヒ終テ、身一ニ成テ、只今源氏ノ胤ノ失ナラズルコソ不便ナレ。二年三年ヲヨモ出シ。ナ泣キソ。ワ君達ナク共、誰カハ助ベキ。(以下略)

と、挿入されているにすぎないのであり、遺言とまでは言えないであろう。同本で後出する、平治の乱に言及した部分では、義朝の死を記して「二年セ保元ノ乱ニ乙若ガ云シ詞ニ少モ違ズ」(未国一〇一頁)と評しているが、それも「乙若ガ云シ詞」とあって、義朝に名指しで残された遺言とはなっていない。つまり、「保元物語」の側でも、「平治物語」への流れを積極的に形成する為に、乙若の一人言的言辭を明確な遺言へとつくり変えていったものと考えられる。

金刀比羅本「保元物語」では、更に、同じく義朝の弟で断罪に処せられた頼仲にも、「あはれ義朝は心狭くも我一人世にあらんとし給ものかな。自然の事もあらん時は後悔し給はむずる物を。一期のうちおぼつかなし。子孫繁昌不実也。」(大系一四八頁)と言わせ、乙若の弟・亀若にも、「我等三四人助をかせ給たらば、好方人にてこそあらんずれ。よからん郎等二三百人にはいかでかかへさせ給ふべき。たゞ今後悔し給はむずる物を、能々はからひ給はで。」(同一五二頁。傍線筆者)と語らせている。処刑された義朝の肉親に、執拗に予言をくり返させているのである。三年後に訪れる義朝の敗北と死が、この時点において決定的となったことを、作者はものがたろうとしたのであろう。平治の乱における義朝の生は、言わば「保元物語」にくり返される予言によって規制された形となったと言える。そして、「平治物語」金刀比羅本段階の諸本は、その規制された生を忠実に熾烈に生きた義朝像を現出させているのである。

「保元物語」の他の諸本は、京図本と流布本が半井本に類似しつつも独自の要素を保持しているほかは、金刀比羅本と同然である。「保元物語」は、京図本(流布本が金刀比羅本以前の姿を残存させているとすれば、それも含めて)の独自性が示唆している如く、必

ずしも単純と言えない展開過程を経ながら、乙若の一人言的予言を遺言として特立させ、且つ他者の口からも同様の言を吐かせることによつて、「平治物語」との連鎖をゆるぎないものとしたのであろう。しかも、この改変は「平治物語」の義朝像のあり方と本質的なかわりを持つていと予測されるのである。

四

「平治物語」で常に義朝の傍に侍し、重要な役割をはたしている鎌田正清も、「保元物語」において変貌を遂げる。

半井本の鎌田は、為朝と対陣した時に余りにもみじめな醜態を見せている。鞍の前輪から尻輪へ鎧武者もろとも射通した為朝の矢の跡を見て、「穴威トテ、舌ヲ振テ申ケレバ」（未国四三頁）という状態であったし、為朝に追いつたてられ、からくも逃げのびた後にも、「アラソシ」（同四五頁）とふがいない告白をしている。これらは、為朝を巨人化する為に敵対者を矮小化するという半井本作者の方法に帰因するものでもあろうが、為朝の関与しない場面でも、彼は嘲笑の的となっている事実がある。

それは、鎌田と波多野次郎とのやりとりを記した以下の如き挿話である——波多野次郎は、為朝の威勢におじ気づいたのか一向に戦場に現われぬ鎌田に、皮肉を一言あびせようと引返すが、彼がそこに見出したのは、義朝の後になって、「馬ニ乗ナガラ弓杖ヲツイテ戦々居テ引ヘタリ」という鎌田であった。戦場に出るよう声をかけても、「鎌田ハ物モ云ズ」にいらぬ。見かねた義朝が、鎌田は最近「ヲコリ心地」で具合が悪いのだと弁護するのであるが、波多野は、橋本の宿場で鎌田に宿を横取りされた恨みをこころ晴らそうと、「哀レ、宿取論ニ勝タリニハ似ヌ物哉」と一笑して帰り、仲間ともこのことを笑いあったという（未国四七頁）。明らかに、このような鎌田像は、「平治物語」で義朝のはやまった行動をしばし抑止して彼を落ちのびさせたりする、沈着冷静な義朝補佐役としての鎌田

像とは相容れないものであろう。当然、金刀比羅本をはじめ、流布本も含めた諸本は、この挿話を抹消している。

そして、後出の諸本には「平治物語」と齟齬しない鎌田像に仕立てようとする努力が見られることとなる。例えば、前記した「穴威トテ、舌ヲ振テ申ケレバ」の一句を、金刀比羅本は「あないかめしの御事候やとあさみたり」（大系一〇五頁）と変え、「アラソシ」を「あなおびたゝしの勢や」（同一〇八頁）と変えて、為朝の強さに驚愕しながらも、なお落ち着きのある態度を堅持している鎌田像を描く。為朝の手並みを知る為に出向く場合でも、半井本が義朝の命によるとしている（未国四三頁）のに対し、金刀比羅本は鎌田自身の意志からとしており（大系一〇六頁）、義朝を先導するような形で補佐する「平治物語」中のあり方に通ずる。また、為朝に追いつたてられた時、義朝陣へ引き入れまいとしてあらぬ方角へ逃げた行為に対し、新たに称讃の言葉が加えられている（大系一〇七頁）のは、鎌田を高く評価しようとする、作者の姿勢の変化を示唆している。

以上四点に関する他諸本（但し、鎌倉本は欠巻の為に除く）の該当箇所は、第一点では、ほぼ金刀比羅本と同類の記述、第二点については、京図本が「あなおそろしや、あぶないめにあふて候つれ」として半井本の性格が感じられるものとなっているほかは、該当箇所のない流布本を除き、やはり金刀比羅本と同様である。第三点は、流布本が半井本に類するほかは、金刀比羅本と同じ、第四点は、京図本、流布本が半井本同様に鎌田称讃の言葉を有さないのみで、他は金刀比羅本同然である。

しかし、金刀比羅本等においても、為義処刑を義朝に勧める鎌田を描いた部分には、古態本同様、作者の批判的筆致が見られる。後出諸本の作者は、半井本作者の創出した人物のイメージに制約されながら、「平治物語」中の人物像との一致を企図したものと考えなければならぬだろう。

最後に信西像について一瞥するならば、後出の諸本では、悪左府頼長のはかりごとを見破る一件を増補している（但し、流布本なし）点に代表される知恵者としての面貌と、為朝の肩を抜かせたり（同じく、流布本なし）、写経を都に納めたいという崇徳院の要望に對して、拒否するように主に促したりする（鎌倉本、京図本・流布本なし）、極刑主張者としての面貌が強まっている。前者については「平治物語」で強調されている信西像の性格と合致する。後者についても、平治の乱で信西が非業の死を遂げざるをえなかったのは、保元の乱に際して長く絶えていた死罪を執行し、埋葬されていた頼長の死骸を掘り起してまで首実検を行なったという冷酷な処置に因があるとする、「平治物語」の側の視点と呼応するものだろう。また、前述したように、信西紹介の一文は「平治物語」の影響を受けたものであった。信西像に生じている変化も、「平治物語」との関連が大きな比重を占めたものと推しはかれる。

五

如上、私は、「保元物語」が「平治物語」と相即的な関係を持して展開していったこと、従って、「平治物語」で主要な役割を演じ「保元物語」にも登場する人物は、「平治物語」の中のある方と合致するよう変貌させられていったこと等を、諸本を検討しながら指摘してきた。特に義朝像の変質は注目に価しよう。この変質を遂げた義朝像との脈絡を無視して、金刀比羅本「平治物語」の義朝を語ることはできない。続稿で論ずる金刀比羅本「平治物語」の世界は、様相を新たにした「保元物語」の世界を受けて、享受者の前に開かれることとなるのである。

注

- 1 半井・金刀比羅・京師・京図・元和・八行の各諸本、及びその系統本。
- 2 「初期平治物語の一考察——陽、学本の志向」（『軍記と語り物』7）

昭和45年4月）、並びに「平治物語初期作者の心——義朝像の問題から」（『国文学研究』51集）昭和48年10月）。なお、「平治物語」の展開については、「平治物語の展開——笑いを通して」（『軍記と語り物』9）昭和47年3月）の論稿を公けにした。

3 現在する古態本にも「平家物語」の影響が部分的に認められる点について、前稿では詳論できなかったもので、ここに補説する。古態本の下巻には、次のような一節がある（傍線筆者）。

抑、保元を為義誅せられ、平治に義朝誅せられしより以来、平家の一門繁昌す。わが身は太政大臣にあがり、子息近衛の大将にあひならび、親類の昇進思さまにて卿雲客六十余人なりき。（学習院本、未国九四頁）

この文が、「平家物語」の諸本にいずれも存する左の箇所と類似していることは、一目瞭然であろう。

保元為義きられ、平治に義朝誅せられて後は、すまぐの源氏ども或は流され、或はうしなはれ、今は平家の一類のみ繁昌して、頭をさし出す者なし。（寛一本二代后、大系一〇七頁）

更に、古態本の「卿相雲客六十余人」という表記に注目する必要がある。平家一族が卿相（＝公卿）と雲客（＝殿上人）だけでも六十余人に達したというのは、些か誇大に過ぎる感がある。これは、次に引く「平家物語」の一文に影響された結果と解するのが最も妥当と思われる。

我身の栄花を極るのみならず、一門共に繁昌して、嫡子重盛、内大臣の左大将、次男宗盛、中納言の右大将、……惣じて一門の公卿十六人、殿上人廿餘人、諸国の受領、衛府、諸司、都合六十餘人なり。

☆ 延慶本・四部本・關譯録・長門本「十餘人」
 ☆ 同「我身栄花」、大系九二頁

※ 延慶本・長門本「八十餘人」

つまり、「平家物語」作者が、「諸国の受領、衛府、諸司」を合わせて「六十餘人」と記したにもかかわらず、「平治物語」古態本作者は「卿相雲客」のみで六十余人と受けとってしまったのであろう。右の文と先の古態本の本文とは内容的にも近い。「卿相雲客六十余人」という記述は、「平家物語」の一節を誤解した故と考える以外にない。

- 4 田中宣一氏「金刀比羅宮所蔵『平治物語』について」（『国学院雑誌』昭和46年7月）
- 5 北川忠彦氏「軍記物の流れ」（『文学』昭和47年7月）
- 6 山下宏明氏は、「平治物語に関する覚書——金刀比羅本系本文の意味するもの」（『中世文芸』昭和40年11月）で、金刀比羅本に「語りら

- しき」を指摘されている。
- 7 永積氏も同様に考えておられるものと思う。
- 8 例外的に、藤岡作太郎氏が「保元物語」「平治物語」「平家物語」より後出であると説き（鎌倉室町時代文学史）大正4年刊、野村八良氏がそれを支持された（鎌倉時代文学新論）大正11年刊）ぐらいである。
- 9 永積氏の前掲解説も例外ではない。市古貞次氏著「中世の文学」（昭和41年至文堂刊）もその弊に陥っている。
- 10 本稿では下記の蔵書になる諸本を用いた。鎌倉本・京師本・杉原本
 〓 彰考館文庫（いずれも汲古書院刊）「保元物語 上・下」〔昭和47、49年〕に縮写影印）。京函本〓 京都大学附属図書館。正木本・保元記〓 宮内庁書陵部。
- 11 「史料大成」所収。
- 12 「注2」の論稿、「平治物語初期作者の心——義朝像の問題から」。
- 13 紅の扇云々については、「愚管抄」第四にも記述があり（大系二二二頁）、金刀比羅本と同じく出陣直前のこととしている。この点、事實は金刀比羅本に近かったものと考えられる。しかし、金刀比羅本作者がこの一件を最後に移行させて出陣直前のこととしたのは、事実に基づこうとした為ではなく、後述したように、義朝像全体のあり方と深くかかわった文学的意図によるものと推察しなければならないだろう。
- 14 延慶本「平家物語」にも同様の記述がある（白帝社版二五一頁）。

付記

私は「平治物語初期作者の心——義朝像の問題から」（国文学研究）昭和48年10月）の稿において、義朝に関する中巻での敬語が、学習院本では二個、陽明本では一個にすぎないと指摘したのであるが、ともに二個の誤りであった。私の見落しによるもので、不注意を詫びるとともにここに訂正する。しかし、全体の論旨に変更はない。